

飼い主の今を探る

Investigating Ownership Today

特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 事務局長・西澤 亮治

Ryoji NISHIZAWA,

Secretary General, Japan Association For Promoting Harmonization Between People and Pets (HAPP)



○西澤亮治

皆さん、こんにちは。動物愛護社会化推進協会の西澤です。今、御紹介いただいたように「飼い主の今を探る」というテーマでお話させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

細井戸先生からも少し紹介いただいたんですけども、平成19年、2007年に設立しましたNPO法人で、特定非営利活動法人動物愛護社会化推進協会という団体でございます。主たる事務所は、大阪の東成区玉造に事務所がございます。本当に広く一般の方へ楽しく犬を、ルールを守って暮らしていきましようということを中心に伝えていきたいということでいろいろと活動しています。【スライド2】

その中の1つが、動物愛護社会化検定という検定ツールを使って、動物の法律であったりとか健康管理のことであったりとかを伝えていくということをやっています。これ7年目になるんですけども、受験していただいた方が、ちょうどことしで1万人に届くぐらいまでになってきました。もっとふやそうグットドックオーナーということで、こういったことをやっています。

【スライド3】

そのほかには、シンポジウムを毎年春と秋の2回やっています。これは直近の、ことしの5月に東京で開催しましたシンポジウムです。テーマは「災害時におけるペットとの同行避難を考える」というテーマで、神戸は20年前に大きな震災を経験していますけれども、東京も非常にこの関心が高くて、たくさんの方が御来場いただきました。シンポジストとしましては、環境省の方と、あと一番東京の人の多い新宿区でこういった防災を担当されている行政担当者の方、あと3年前の東日本大震災を経験された仙台市の動物管理センターの、ずっとその震災対応された所長の方に来ていただきまして、お話をいただいたということになっていきます。【スライド4】

このほかにも、いろいろシンポジウムをずっと続けてやっているんですけども、ちょうど昨年の秋に、「高齢者とペット」というシンポジウムを大阪で行いました。神戸の六甲にあります特別養護老人ホームで、20年来、CAPPを受け入れられている施設の施設長の方、あと和歌山で動物病院の看護師の方なんですけども、そのCAPPを実際にやられていたりとか、また動物病院としての高齢者の対応をどうされてるかというお話をいただいたりをしました。ことしも、実は10月に、もう少し議論を深めようということで同じテーマでまた大阪でシンポジウムを予定しております。またよろしければ御来場いただけたらと思います。

【スライド5-6】

こういったシンポジウムに合わせて、私どもこういった調査、一般の飼い主の方への調査を割と得意としています。ペットロスについてとか、地域猫についてだったりとか、高齢期を迎える愛犬に関する調査とか、こういったシンポジウムに合わせていろいろ調査してるんですけど、これ、昨年の高齢者とペットというシンポジウムに合わせて、高齢飼い主の意識調査を昨年行いました。今回、こういう機会をいただきましたので、ことし6月末にペットに対する意識調査もさせていただきます。これは後ほど御紹介させていただく予定にしております。【スライド7】

今日の私の話の内容としましては、1つ目に日本の人口動態、高齢化社会は実際にどういうものなのかを数字をお示ししながら説明させていただきます。それと現在の犬猫に関する社会の環境。3つ目に今、申し上げたアンケート調査のサマリーですね。それから4つ目に、これからの課題、私たちにできることをまとめてお話しさせていただきたいと思います。【スライド8】

日本の人口動態で、過去からずっと変わっていく様子が出ています。人口ピラミッドというものですが、残念ながら1970年以降は、非常にいびつな形になっ

ていくのがわかるかと思えます。これが1960年、ちょうど私が生まれた時代のものですが、比較的ピラミッドの形はしていますが、ちょうど矢印のところが戦後の第1次ベビーブームで生まれた団塊の世代といわれるところの状況になってます。このときが、65歳以上が1人に対して20歳から64歳の人口が9.1人、9対1という割合がこのときです。それから50年たった2010年で言うと、非常にこういったたる型、上の方の矢印が第1次ベビーブームで、下のほうの矢印が第2次ベビーブームになるんですけども、このボリュームが非常に高くなっていると。このときは、ちょうど今ですね、今は65歳以上1人に対して20歳から64歳が2.4人という割合に、今、なっています。これが将来、完全に少子化ということで下の方が狭くなってまして、上が広がってるんですけども、このときが65歳が1人に対して1.2人という非常に支えるほうも、支えられるほうも非常に不安定な状況になっていることがこれでよくわかるかと思えます。もう少し具体的に数字で行きますと、現在、2012年8月の資料では約3,000万人が65歳以上。よく新聞でも4分の1が高齢者、65歳以上と言われるのはこのとおりになっています。これが来年の2015年には3,400万人、2025年には3,657万人という非常に3人に1人が65歳以上ということになっております。それで、よく今、2025年問題と言われてるんですけども、ちょうど先ほど示させていただいた戦後のベビーブームで生まれられた方が、ちょうど今、65歳になろうとしています。あと10年たちますと、この600万人とも言われている一番大きな層が65歳から75歳という人口構成になると今、言われております。

あわせて、認知症の高齢者の方の割合というか、人数も本当に年々ふえていく状況になってます。現状で、約3,400万人の方の1割の方が認知症、日常生活自立度2以上の高齢者、2は認知症の症状は出てるけども第三者、どなたか、周りの方の注意さえあれば自立ができるという状況の方が2と示されてるんですけども、そういった方がこれぐらいの割合でおられるという状況になっています。これも細井戸先生がお話しされたように、こういった状況を踏まえて健康寿命、今の現状では男性が79歳、約80歳、女性が86歳という平均寿命となってるんですけども、それに対して男性が70歳、女性が73歳という健康寿命の資料が出てます。その差が男性で約9年、女性で12年となってるんですけど、この差をやっぴりいかに縮めるかが今のテーマになっています。これは医療費の削減であつたりとか、

介護サービスの負荷の低減であつたりとかいうことを目的にしておりますけれども、先ほどの2025年問題の中で、やはり今の、特に人手不足、人口減の中で人が足りなくなるというのがありまして、特に介護サービスの分野で、とてもじゃないけども人が足りないよというのが今、明らかになってます。それに合わせて今、海外、外国からの労働者輸入という問題も今、出てるんですけども、そういったことも検討、議論されている中で、やはりこの健康寿命を長くして平均寿命の間を縮めていこうという働きかけをされているのが今の状況でございます。

次に、これはちょうど本当に先々週、12日にNHKのニュースで出てました。ことしの厚生労働省の白書で、健康寿命延伸に重点ということが非常にこれもトピックでニュースで出てたという状況です。

【スライド9-16】

次に、現在の犬猫に関する社会環境をお話しさせてもらいます。これは、ペットフード協会さんが毎年調べておられる犬の飼育頭数の推移、上のほうの青い線がペットフード協会さんの資料になりまして、下のほうの赤い線が厚生労働省の登録頭数となっています。この差異のところにつきましては、時間がないので割愛しますけれども、2008年をピークにしまして約1,300万頭ほどあった犬の頭数は、今、年々減っているという状況になっています。次に、猫のほうもやっぱり2008年が一番多かったんですけども、これも少し減りまして。今は横ばい状況になっております。年代別の飼育状況と飼育移行率という数字であらわしてるものです。やっぱり一番ボリュームのところは50代を中心として40代、60代という年代が一番多い飼育率になっておりますが、2012年と比較しますとこの2つ、20代の犬、30代の猫以外は全部下がっている状況になりまして、先ほどの飼育頭数の推移を見ましても、これから減っていくであろうという予測が今のところはなっている状況です。【スライド17-20】

これも犬猫の平均寿命、これも直近のペットフード協会さんの調べでは犬が14.2歳、猫が15歳ということになっておりまして、調査方法が違いますので単純に比較はできませんけども、過去の調査からすると随分と長生きになってきたのがわかるかと思えます。また、先ほど紹介しました人のほうの人口動態と非常に近いところがございます、全体の数は減りつつありながら寿命が延びるところで、非常に人間の構成と似たところが今、出てるように思います。

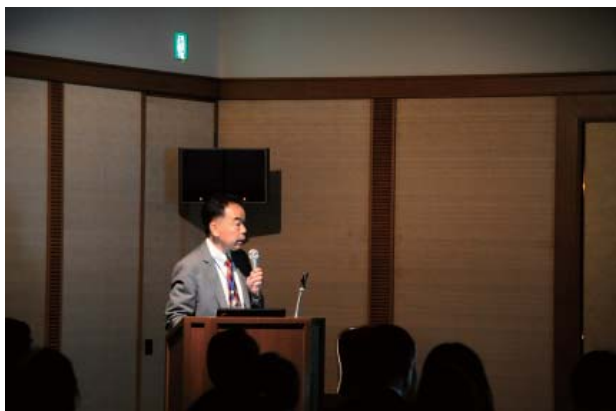
【スライド21】

これは毎年、大阪府獣医師、大阪市獣医師会の共催で行われているイベントなんですけども、長寿動物表彰というイベントで、猫の部門と小型犬、中型犬部門と、大型犬部門があるんですけど、やっぱりかなり長寿、長生きするわんちゃん、猫ちゃんがふえてきております。このときは1時間ほど、400頭ぐらいですかね、こういったスライドと飼い主さんのコメントがずっとこのスライドで紹介されるんですけども、非常にいいイベントになってきていると思います。本当に心があつたかくなるようなイベントを毎年やられています。

【スライド 22-23】

これはちょっとまたペットに関係することではあるんですけども、これは昨年12月に千葉の幕張にできましたイオンモール幕張新都心というこのグラウンドモール、ファミリーモール、アクティブモールという大きな、これ一つ一つが大きな建物の中に商業施設が入ってるんですけども、それが1カ所に集まった施設ですけども、その中にペットモールというペットだけのモールが去年の12月にできています。その中には動物病院も設置されて、ここはたしか夜間対応もしてたと思います。こういった施設だったりとか、本当に、人間向けのスイーツ売り場みたいな、これはペット用のおやつ、食べ物ですが、こういった売り場があったりとかしています。特徴としましては、ペット飼育者以外の多くの人にも見せる工夫がされていることと、動物医療や生体販売、用品販売、トリミング、しつけ教室、ホテルなどの全てのサービスを集約している、こういった施設が誕生しています。これとあわせて、いわゆる譲渡犬、新しい飼い主を捜す犬のコーナーもこの中にあるような、本当にあらゆるペットサービスが全て入っている商業施設が出てきました。昔はやはり百貨店の屋上とか、あんまり一般の方が目につかないところにペット売り場があったんですけど、そうじゃなくて、本当に先ほどのいろいろの建物同士の通路から全部これが見えるような施設ができてきた状況になっています。

【スライド 24-27】



これはインターペットという大きなペットのイベントです。これも毎年行われてまして、ちょうど来週の24日から東京でまた行われるイベントなんですけども、ペット用品だけではなくて、写真でもあるように、車の販売メーカーであったりとか住宅関連の建材メーカーさんであったりとか、モバイルで犬の運動量をはかったりとか、そういったサービスもいろんなところが参入してくるといって大きなイベントになっています。主催者の発表では、一般の方だけで約3万8,000人、関係者入れると4万人を超える方の動員がある大きなイベントになっています。【スライド 28】

やっとなんですけども、アンケートの紹介させていただきます。これもちょうど6月の末に調べた直近の資料になります。インターネットを使って約16万人ぐらいの飼い主さんに対して投げたアンケートで、約5,387件の回答をいただきました。年齢構成はこういうことになりまして、やっぱり40代、50代という方が一番のボリュームで7割ぐらいを占めているアンケートになります。回答者は女性の方が8割を超える圧倒的な回答になっています。回答者のプロフィールです。

【スライド 29】

ここのペットの年齢、これもペットフード協会さんの年齢の切り方は違うんですけども、やはり0歳から4歳までの若い犬、猫よりもそれ以上の犬猫のほうが大きいという状況となっておりますので、やっぱり先ほどのペットも高齢化というのが顕著かなというのがわかるかと思えます。【スライド 30-31】

ペットの種類はということで、ペットの種類と、同居されている家族でちょっと調べてみたら構成がこういうことになっています。若い若年層の方のほうが猫の飼育率が高く、高齢になるほどやっぱり犬を飼っている方の割合が高いのがこれでわかるかと思えます。

【スライド 32】

心配、ペットを迎えるときに心配したこと、不安に思ったことはということは、やはり健康を守って長生きをさせてあげられるだろうかであるとか、しつけがちゃんとできるだろうかというのが、非常に大きな部分になっています。やはり飼い主さんの意識が高くなってきているんじゃないかなというのがこれでわかるかと思えます。それと下のほうにあるんですけど、60歳以上のだけの方でサマリーしたのが赤いほうなんですけども、心配したことの中で極端に違うのが、自分の年齢や健康状態が心配だというのが65歳以上は顕著に出てきているのが、これでわかるかと思えます。

【スライド 28】

次に、ペットと暮らしていてよい面はという質問については、やはりこれは断トツで毎日がペットと一緒に過ごすことで楽しく暮らせるという方、また心が通じ合うように思えるというのがこれが圧倒的に多いです。これは昨年秋、1年前にとったアンケートでもこれは全く同じでございます。【スライド 34】

困ってること、不安なことはというのは、やっぱりペットが死んでしまったら、今いるペットが死んでしまったらと思うと、とても悲しくなるんじゃないかという心配、あとペット自身の健康、高齢化ということが出ております。これも下のほうに60歳以上の方だけで見ますと、近い将来、自分が高齢や病気などによってペットが飼えなく、世話ができなくなるのではないかということが心配なこととして挙げられております。

【スライド 35】

有料でも利用したいサービスはというところでは、これは特に60歳以上では極端な差はございません。外出や旅行の時期、一時的に預かってくれるとうれしいなどというのが、これは毎回多いです。こういったことがなっています。これはやはりこれからのいろいろペット関連のサービスを提供していくとこのヒントになるかなと思っています。【スライド 36】

また新たに、これからペットを迎えたいですかと質問を投げたところ、そのときにならないとわからないという方が多いのはこれもあれですけども、また飼うことが、また飼いたいけど飼うことができないと思うという方がやっぱり赤で示しているように60歳以上では極端に高くなります。同じようにこれがあらわした数字ですけども、右の青い棒グラフの青い色が、また飼いたいけど飼うことができないと思うという割合の方の表になります。やっぱり50代、60代、70代といくにつれて、この割合が高くなるというのは出てきています。この理由が何ですかと聞くと、これも圧倒的に自分の年齢を考えるとペットを最後まで世話が続けられないということが、本当はペットを飼いたいんだけども飼えない理由の一番大きなものになってきています。同じように二度と飼いたくない理由を投げても、これも同じように自分の年齢を考えるとペットを最後まで飼うことができないというのがこれが高くなってきているのはこれは顕著に出てきています。これも昨年のアンケート、同じようなアンケートとったときも全く同じでして、約4割ぐらいの方がやっぱり飼いたい、同じく4割ぐらいの方が飼いたいけど飼えない。だから全体で8割ぐらいの方が飼いたいと思ってるというのが高齢の方でも出てきてました。【スライド 37-40】

ペットはどんな存在という質問では、これはあんまり年代では特に差異はないんですけども、家族の一員、子供と同じような存在、夫婦や家族の関係をよくしてくれる存在、暮らしに役立つ、それと心の支え、励みになるということがこういったような構成で出てきています。【スライド 41】

これからの課題、私たちにできることということで、これは皆さんも大体、これはあるかと思えます。高齢者とペットの暮らしを支援すること、飼い主の責任、適正な飼養、終生飼養ということをどう皆さんに伝えていくか。また動物の高齢化対応、ペットロスのケア、飼い主のいない犬猫の対策、また緊急災害時の対応、このほかにもいろいろあると思えますけども、こういったことが挙げられると思えますが、今、厚生労働省の老健局で、地域での高齢者の生活を守る地域包括ケアシステムが今、示されています。ちょっと図が小さいのでわかりづらいんですけど、これ真ん中に高齢者の方がおられまして、病気になったらということで医療、介護が必要になったらということで右側の介護の関係のサービス、それと生活支援と介護予防ということで、ふだんの生活をきちっとサポートするという意味のこういった絵ですけども、こういったことを今、厚労省のほうで示されています。ホームページをごらんになるとすぐ、地域包括ケアシステムと検索すると、こういった資料いっぱい出てきます。【スライド 42-44】

結局、先ほどの人口構成でいっても、2050年に1人が1人を支えるようになってましたけど、今、現実に地域によっては、地方の、例えば鳥取県とか、本当に地方によったらあれに近いような人口構成になっている地域もあつたりとありますので、それぞれの地域でそれぞれ工夫して、こういった高齢者の方を支えるシステムを医療関係者、介護サービス、そういった業者、関係を通じてつくっていきましょうと今言われております。

同時に、これも災害の対応に近いんですけども、自助、互助、共助、公助ということが今、特に強く言われています。特にこの自助、互助というところをこの介護、高齢者を支える意味でも、これを力を入れていきましょうということが今言われております。

これ私の意見を、毎回言うんですけども、地域の動物病院が果たす役割は、私はより重要になってくると思っています。動物の病気を予防する、けがを治す、診療するという本来の動物病院の役割以外に、やはり高齢者の方がどんなふうに飼育を助けるか、またその高齢者の方がもし飼えなくなったときにどう対応するか

ということの役割を、これからは動物病院が担う部分が非常に大きくなっていくと私は思っています。人の医療機関や介護サービスの連携、動物の訪問看護ケア、飼うことができなくなった場合の支援などということで、動物病院に求められていくと私は考えています。

【スライド 45】

これ、先ほどの地域包括ケアシステムの絵なんですが、その中の右側にわざと無理やりですけども地域医師会と、獣医師会の連携、獣医師による動物医療の提供、動物看護師、ドッグトレーナーによる飼育、介護、ケアの支援などということ無理やり入れた絵にしました。こういった地域包括ケアシステムに動物医療関係者であったりとか、私も含めた企業、ペット関連の企業、また、こういった意識の高い方がこれに参画することが、これからは必ず必要になっていくと私は考えています。

超少子高齢化の社会、人口の減少という、日本が今現在、迎えているんですけども、これを悲観しても仕方がありませんので、これはこれで現実として受けとめて、自助、自分が何かできるのか、互助、共助、地域の連携や協働といった私たち自身が主体となって準備や工夫を進めていくこと、これをやっぱり探っていくかといけないかと考えています。

具体的には動物、きょうも動物医療関係者の方来てらると思いますけども、やはり地域の人間の医師会であるとか人間の介護サービスさんに、私たちのほうから接点を持つような働きかけが必要かなと思っています。動物看護師、最近ケアマネジャーの方とお話しする機会が割とあるんですけども、やはり高齢者の対応、どんなふうに高齢者の方に適切に対応するかという知識を持つか持たないかで全然違ってくるとよく言われます。ですから動物看護師の方、ドッグトレーナーの方、また獣医師の方も、こういった部分に私たちのほうから参画、入っていくような努力が必要じゃないかなと思っています。そういったことを通じて、地域の中での高齢者が長く動物と暮らせる、先ほどのアンケートにあったように、自分の健康に役立つ動物と暮らすことが楽しいということが明らかに多くの方がおっしゃられていますので、それを私どもがお手伝いをしていくという形を、先ほどの 2025 年に向けての中で取り組んでいきたいと私は考えています。【スライド 47-49】

御清聴どうもありがとうございました。

○座長

西澤先生、ありがとうございました。やはり介護のお

仕事をなさっている方から何うの、「利用者さんのところに伴侶動物、わんちゃんなり猫ちゃんなりがいたときに、何か手伝ってあげたいと思っても、自分たちがやる事業の中にペットの飼育支援のようなことが入っていないので、私たちは手を出すことができないんです」ということがあります。介護保険の中に、伴侶動物の世話は今入っておりません。もしも伴侶動物の世話の部分に介護保険を適用いただけるようなことがあれば、また、先ほど出てきたような NPO という形ではなく、先ほど尼崎市さんがおっしゃいましたけれども、「何でもボランティアでいいんですかというので、お金集めました」ということがありましたけれども、何らかそういったところをきちんと支援できるシステムができれば、それがまた、新たなビジネスの展開にもつながっていくのではないかなと思いつく次第です。

飼い主の **今** を探る

第3回 神戸アニマルケア国際会議

「ずっと一緒に居られる」社会へ
飼い主を支えるシステムが実現する豊かな社会

2014年7月20日(日)
特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会
西澤 亮治

【スライド 1】

これまでに実施した主なシンポジウム

- 2008年4月 「日本における子犬と飼い主の出会い
— その時期の現状と課題について考える」
- 2009年5月 「ペットの食の安全を考える」
- 2009年10月 「ペットを共通感染症から守るために」
- 2010年5月 「動物愛護推進員の役割と課題」
- 2010年10月 「家庭動物の個体識別を考える」
- 2011年10月 「飼い主が望む緊急災害時の動物救援体制を考える」
- 2012年5月 「ペットロスを考える」
- 2012年10月 「ペットの平穏な死を考える」
- 2013年5月 「動物愛護管理法 次の改正にむけて
— 動物たちが望む飼い主の責務について考える」
- 2013年10月 「高齢者とペット」※
- 2014年5月 「災害時におけるペットとの同行避難を考える」
- 2014年10月 「高齢者とペット」※

【スライド 5】

特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 Profile

Japan Association For Promoting
Harmonization Between People and Pets

□ 主たる事務局
大阪市東成区中道3丁目8番11号 NKビル2階
Tel.06-6971-1162 Fax.06-6971-1172

www.happ.or.jp info@happ.or.jp

□ 設立 2007年(平成19年)8月/内閣府認証

【スライド 2】

特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会
2013年 秋の公開シンポジウム

高齢者とペット

開催日: 2013年10月12日(土)
時 間: 11:00~17:00 参加無料
会 場: 大阪ベビィ動物看護専門学校
2F セミナーホール

高年齢飼い主の増加に伴い、高齢者にとってペットとの生活は、心身の健康維持に大きく貢献しています。本シンポジウムでは、高齢者にとってペットとの生活がもたらすメリットや、高齢者がペットと暮らす上で注意すべき点について、専門家による講演やパネルディスカッションを行います。

◇ コーディネーター
・ 林 昌雄 特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 副理事長
◇ パネリスト
・ 石塚 千穂 特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 理事
・ 藤原 泰太郎 公益社団法人 日本動物福祉協会 理事
・ 西澤 亮治 特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会 代表理事



【スライド 6】

もっと
増やそう



Good Dog Owner

【スライド 3】

これまでに実施した主な調査内容

- 2009年 「犬の迷子札に関する意識調査」
「飼い主のいない猫・地域猫に関する意識調査」
- 2010年 「愛犬との出会い・愛猫との出会いに関する調査」
「高齢期を迎える愛犬に関する調査」
- 2011年 「ペットに対するマナーやケアに関する調査」
「飼い主とペットの災害時の備えに関する調査」
- 2012年 「ペットロスについての意識調査」
「地域猫についての意識調査」
- 2013年 「愛犬との出会い・愛猫との出会いに関する調査」
「高齢飼い主の意識調査」※
- 2014年 「緊急災害時の備え・同行避難に関する意識調査」
「ペットに対する意識調査」※

【スライド 7】



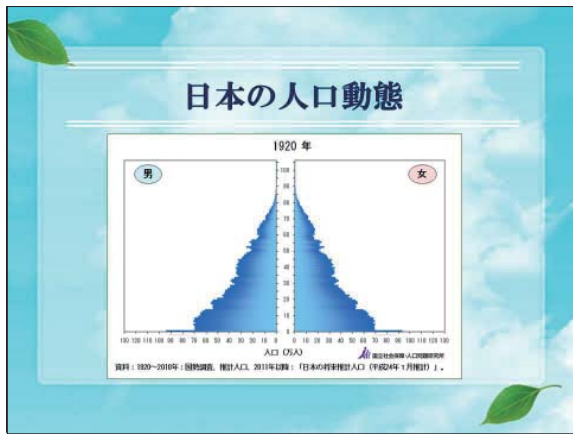

東京大学農学部弥生講堂 / 2014年5月25日

【スライド 4】

発表の内容

1. 日本の人口動態
高齢化社会の実際
2. 現在の犬・猫に関する社会環境
3. 飼い主さん 5,370人に聞きました
意識調査アンケートから
4. これからの課題、私たちにできること

【スライド 8】



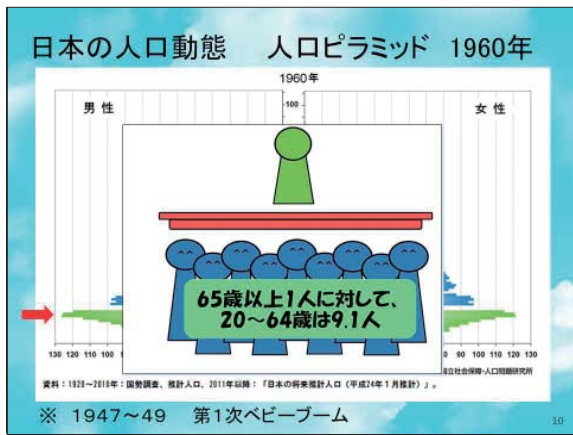
【スライド 9】

高齢者人口の見通し

高齢者人口	2012年8月	2015年	2025年	2055年
65歳以上	3,058 万人	3,395 万人	3,657 万人	3,626 万人
(割合)	24.0 %	26.8 %	30.3 %	39.4 %
75歳以上	1,511 万人	1,646 万人	2,179 万人	2,401 万人
(割合)	11.8 %	13.0 %	18.1 %	26.1 %

65歳以上の高齢者数は、2025年には3,657万人となり、2042年にはピークを迎える予測(3,878万人)。また、75歳以上高齢者の全人口に占める割合は増加していき、2055年には、25%を超える見込み。
※厚生労働省老健局資料(2013年5月)より

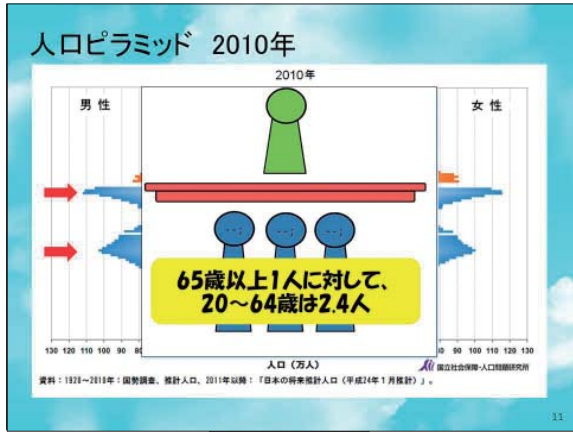
【スライド 13】



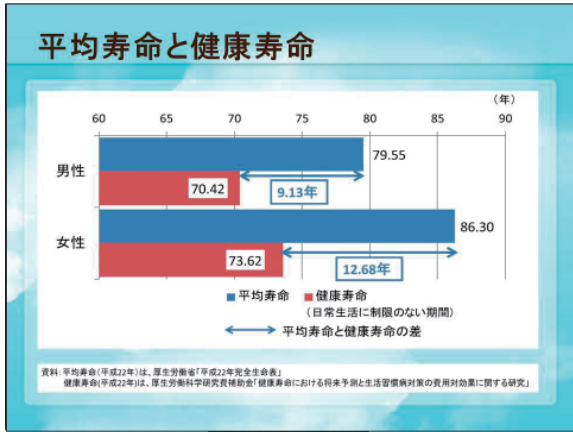
【スライド 10】



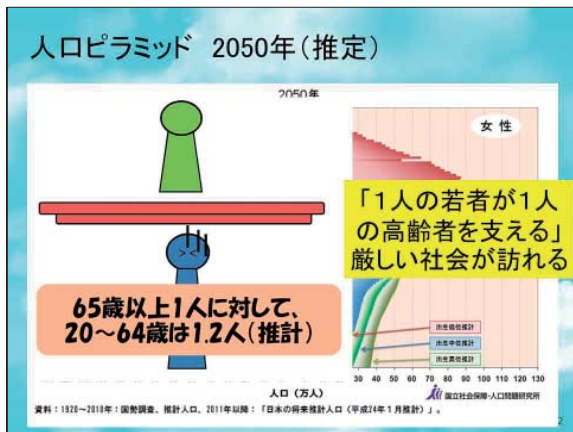
【スライド 14】



【スライド 11】



【スライド 15】



【スライド 12】



【スライド 16】

現在の犬・猫に関する社会環境



【スライド 17】

犬・猫の平均寿命の変化

《2013年度 一般社団法人 ペットフード協会調査》

- ・犬 14.2歳 超小型犬、小型犬の寿命は長い
- ・猫 15.0歳 完全室内飼育の場合は15.7歳
「家の外に出る」猫は13.2歳

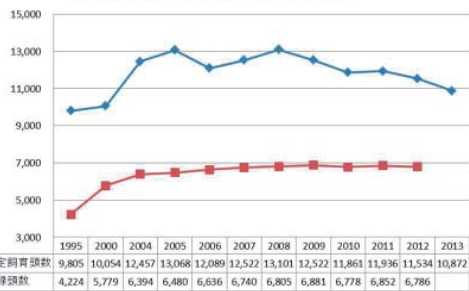
《2002年8月～2003年7月 東京農工大学・林谷秀樹准教授の調査》

- ・犬 11.9歳 (1990年の調査 8.6歳)
- ・猫 9.9歳 (" 5.1歳)

【スライド 21】

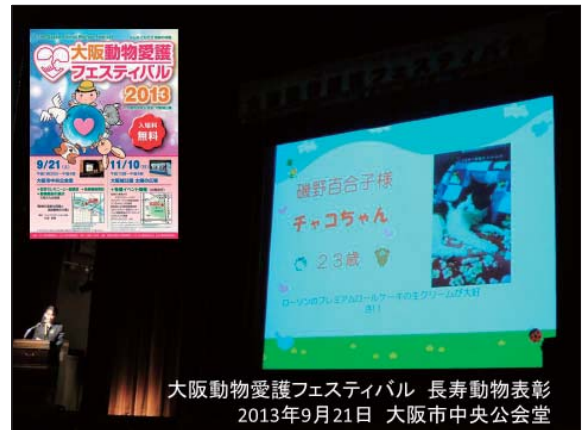
犬 飼育頭数の推移

厚生労働省資料/一般社団法人ペットフード協会資料



2012年度 厚生労働省 犬の登録頭数資料、及び
2013年度 ペットフード協会 犬猫飼育実態調査資料より

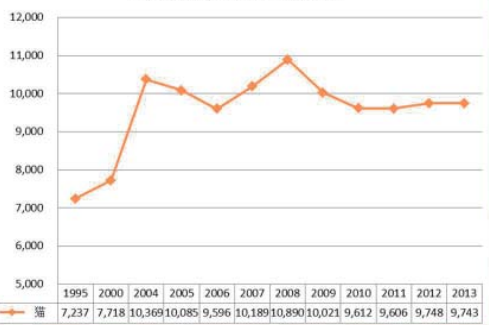
【スライド 18】



【スライド 22】

猫 飼育頭数の推移

一般社団法人 ペットフード協会資料



2013年度 ペットフード協会 犬猫飼育実態調査資料より

【スライド 19】



【スライド 23】

年代別の飼育状況と飼育意向率

年代別飼育状況	犬		猫	
	2013年	2012年	2013年	2012年
全年代	15.8%	16.8%	10.1%	10.2%
60代	16.4%	18.2%	10.9%	11.3%
50代	20.0%	21.4%	11.8%	12.1%
40代	15.1%	16.1%	9.8%	10.3%
30代	12.7%	13.3%	★ 9.0%	8.2%
20代	★ 15.1%	14.8%	9.0%	9.1%
飼育意向率	26.8%	30.4%	16.8%	18.2%

2013年度 ペットフード協会 犬猫飼育実態調査資料より

【スライド 20】



【スライド 24】



【スライド 25】

ペットに対する意識調査アンケート

調査期間 2014年6月23日～30日

対象 一般の犬・猫の飼い主

方法 インターネットを利用

回答数 5,387件

29

【スライド 29】



【スライド 26】

回答者(5,387名)の年代構成と性別

80歳以上	9名(0.2%)	女性	4,649名(86.3%)
70~79歳	47名(0.9%)	男性	738名(13.7%)
60~69歳	421名(7.8%)		
50~59歳	1,650名(30.6%)		
40~49歳	2,182名(40.5%)		
30~39歳	885名(16.4%)		
20~29歳	183名(3.4%)		
20歳未満	10名(0.2%)		

30

【スライド 30】

PETMALL PECOS/イオン幕張新都心

ペット飼育者以外の多くの人も「見せる」工夫がなされている

動物医療・生体販売・用品販売・トリミング・しつけ教室・ホテルなど、すべてのサービスを集約

27

【スライド 27】

回答者(5,387名)のプロフィール

●お住まい

一戸建て	69.0%
分譲マンション	18.0%
賃貸マンション	10.0%
公営住宅	1.0%
その他	3.0%

●家族構成

夫婦二人	37.1%
親と同居	22.7%
子どもと同居	18.0%
一人暮らし	11.0%
親・子供と同居	5.0%
その他	6.2%

●ペットの種類

犬	59.3%
猫	30.7%
犬・猫両方	8.1%
その他	1.3%
今は飼っていない	0.6%

●ペットの年齢

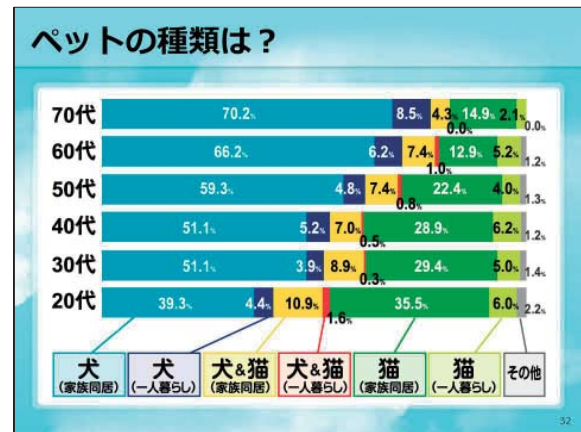
13歳以上	15.7%
9~12歳	21.3%
5~8歳	26.8%
2~4歳	24.6%
0~1歳	10.9%

31

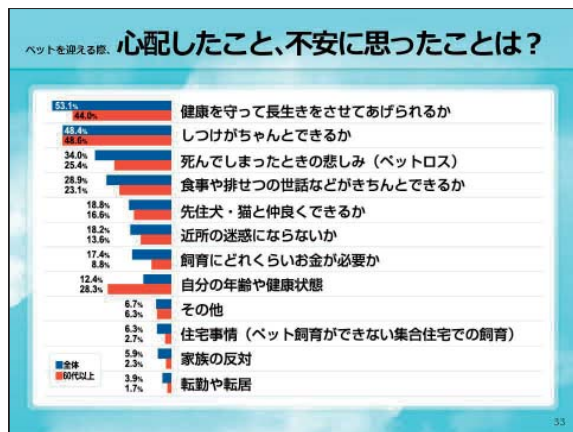
【スライド 31】



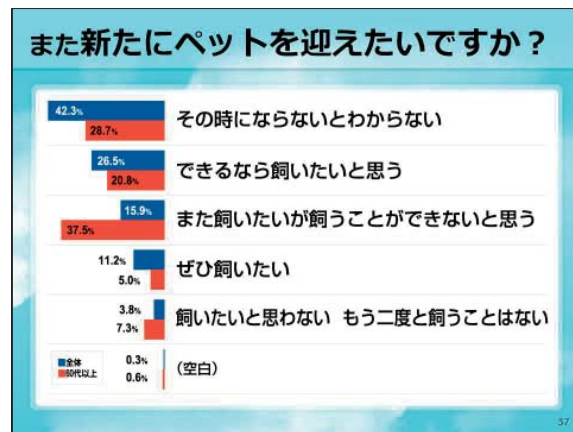
【スライド 28】



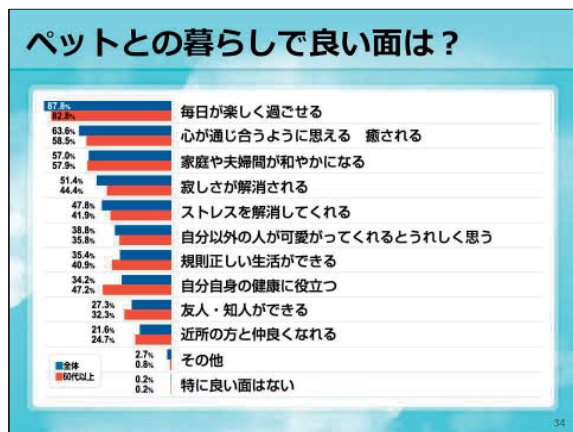
【スライド 32】



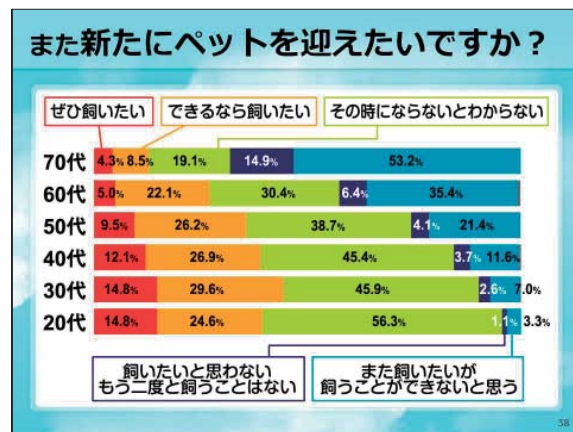
【スライド 33】



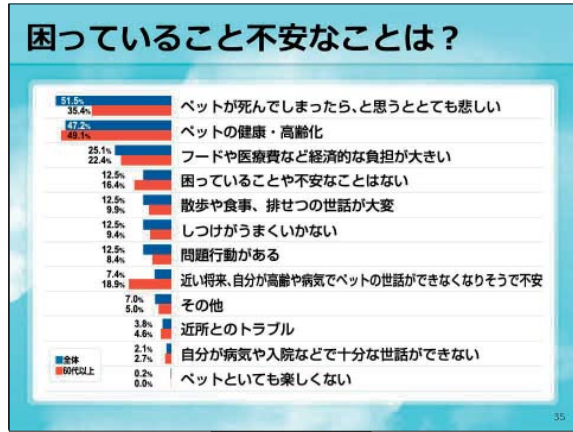
【スライド 37】



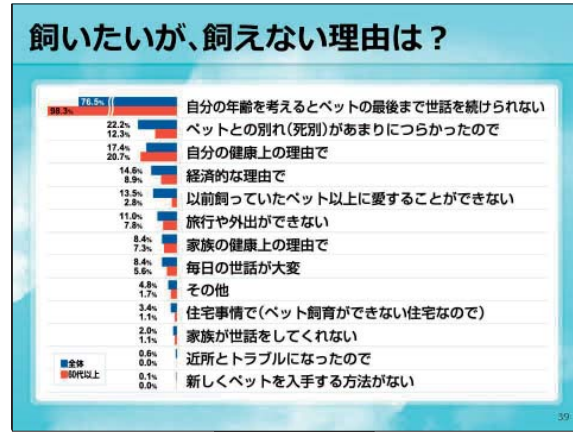
【スライド 34】



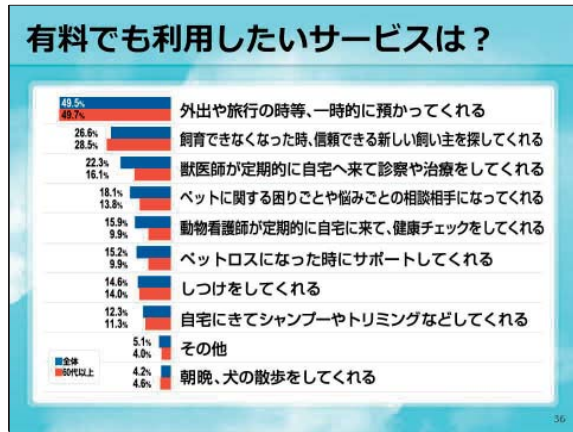
【スライド 38】



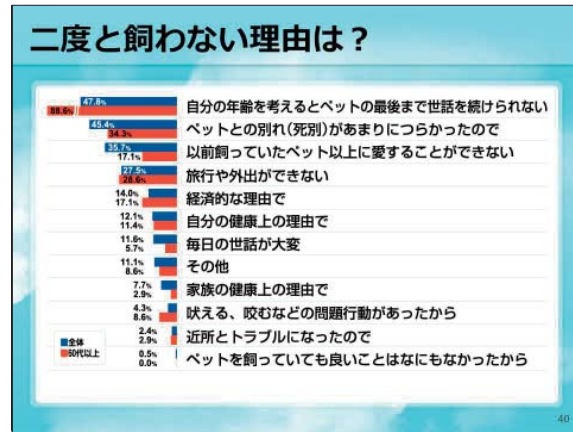
【スライド 35】



【スライド 39】

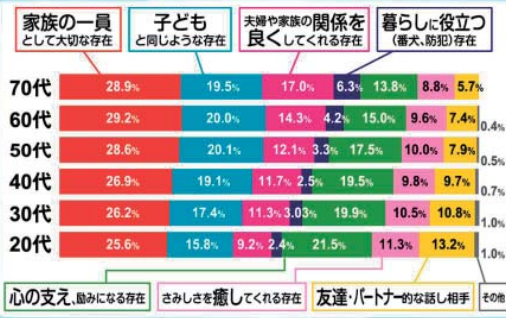


【スライド 36】



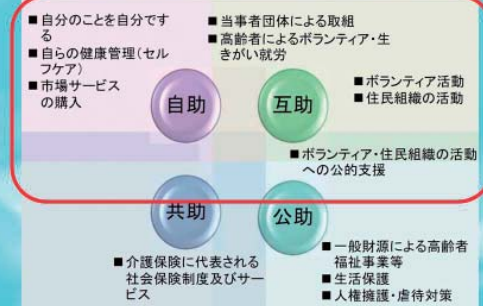
【スライド 40】

ペットはどんな存在？



【スライド 41】

「地域」で高齢者の生活を守る - 自助・互助・共助・公助 -



【スライド 45】

これからの課題 私たちにできること

- ・ 高齢者とペットの共生支援
- ・ 飼い主責任 適正な飼育、終生飼養
- ・ 動物の高齢化対応・ペットロスのケア
- ・ 飼い主のいない犬・猫対策
- ・ 緊急災害時等の対応 (自助・共助)

【スライド 42】



地域の動物病院が果たす役割はより重要に。人の医療機関や介護サービスとの連携、動物の訪問看護・ケア、飼うことができなくなった場合の支援など。

【スライド 46】

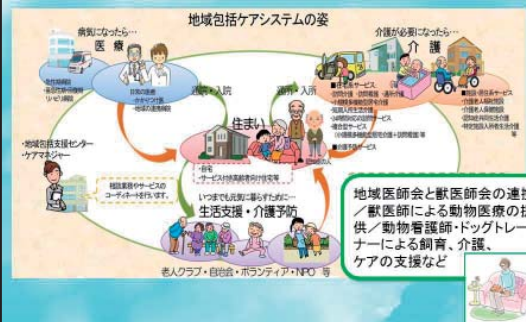
「地域」で高齢者の生活を守る 地域包括ケアシステム

2013年6月 厚生労働省老健局が示した高齢者の医療・介護に関する基本指針。同塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を推進する。

※地域包括ケアシステムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要。

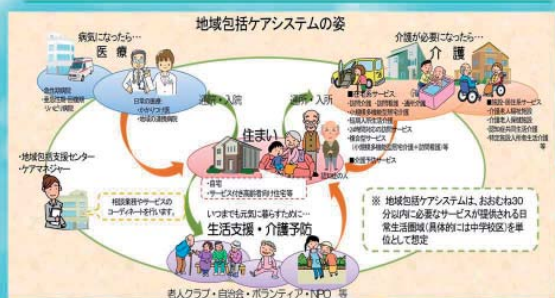
【スライド 43】

地域包括ケアシステムへの参画



【スライド 47】

「地域」で高齢者の生活を守る 地域包括ケアシステム



【スライド 44】

「超少子高齢化社会」「人口の減少」という日本が迎えている現実を悲観するのではなく現実のこととして受け入れ、「自助＝自分は何ができるか」「互助・共助＝地域の連携、協働」といった私たち自身が主体となって準備や工夫を進めていかなければなりません。

動物医療関係者(動物病院・獣医師・動物看護師)、ペット関連企業、ペット関連学校等が協力して「地域包括ケアシステム」に「ペットの飼い主」が安心してらせる支援方法を付加していく必要があると考えます。

【スライド 48】

ご清聴ありがとうございました



2014/8/30

01

【スライド 49】